

と云ひ出した。廣業は笑つて、

『いや、親爺、もう澤山だ。吾々が汚したのも、すぐ職人と呼んで張替へさせやうか?……』

と、からかつた。斯ういふ事にかけては、廣業は類の無い達者さを持つてゐた。その時の繪は、忽ち有名になり、その繪を見る爲にわざ／＼その宿を選ぶ、といふやうな人もあつたと聞いたが、惜しいことに火事で焼けてしまつたと云ふ。

(「寺崎広業」『回顧七十年』昭和十二年。学校美術協会出版部)

⑨ 美術祭

明治三十六年十一月三日の天長節にあたり、校友会は本校設立十五年を記念して美術祭を挙行し、あわせて展覧会を開催した。これについては『東京美術学校校友会月報』第二卷第三号「美術祭之卷」(明治三十六年十二月)および『美術祭紀念帖』(同校友会編。同三十九年三月)に詳しい記録がある。それによるとこの美術祭は

上は神代より、下は明治の今の世に至るまで、澤を我邦の美術に遣したる先達鉅匠と、遠くは西洋諸國に在りて、我邦今代の美術に功績ありし大家名手の高風遺徳を追慕するの餘り、其流を酌む幾百の我會員等相謀りて一場に會し、其英靈を請して之を祀り、以て高德の存する所を仰ぎ、以て虔敬の衷を致し、又謹みて弔慰の赤誠を表するに在り。

という主旨のもとに挙行されたもので、わが国古来の風習であると

ころの先人の高風遺徳を称える祭奠や欧米の美術家の間で行なわれている美術祭などの例に倣つたのであるが、全校あげてこのような催しを行なつたことは、美術学校騒動以来の動揺が静まり、校内の空気が安定したことを象徴しているように見える。正木直彦は前年二月の『教育公報』に掲載された談話のなかで、「歐米にては美術家を出したる郷里にては其の美術家のために祭をなし頌徳の碑を立て以て其の郷里の飾ともなし榮譽となすの風は決して珍らしからず」と芸術上の偉人をたたえる風習を称賛しており、このことから見て正木自身も美術祭挙行には大いに賛成であつたと考えられる。天長節に開催したのは計画の決定が九月で、十月四日の設立記念日までに準備が間に合わなかつたためである。「第一回美術祭」と銘打つて開催したところを見ると、その後も逐次開催する予定だつたらしいが、実現せず、校友会の美術祭としてはこれが最初で最後だつた。

後々まで語り伝えられたこの空前絶後の美術祭は、今日の学園祭とは全く異なり、教師と生徒が一体となつてその準備や進行にあたり、ともに祝い楽しんだ。監事長高村光雲、幹事大沢三之助、羽田楨之進、石井吉次郎らのもとに教師と生徒が各種の役目を分担して祭りを盛り上げ、校内は三万人の来観者で賑わつた。左記は当日の催しものの概況である。

十一月三日

(一)美術祭式典 午前九時

祭壇(竹内久一、島田佳矣、関保之助らの考案による)を前に

神職が修祓を行い、烏帽子浄衣姿の正木会長が御真影を奉拝して会員一同奉拝を行い、次いで神職が各科祭神の降神式を行い、神饌を供す。祭神は次のとおり。

狩野芳崖 日本画科

ラファエル 西洋画科

野見宿禰 彫刻科

尾形光琳 図案科

後藤一乗 彫金科

明珍信家 鍛金科

石磯姥命 鑄金科

本阿弥光悦 漆工科

続いて正木会長の祝詞朗読があり、式典終了。

(二) 遺蹟展覧会

本校内の三室に各科祭神の作品、関係資料を陳列し、祭神の肖像および各科作成による祭神の略伝を掲げた。略伝は月報「美術祭之巻」に、出品目録は同誌および『美術祭記念帖』に登載されており、それによると狩野芳崖に関しては「悲母観音」をはじめとする本校所蔵の芳崖作品と岡倉覚三、橋本雅邦、浜尾新、河瀬秀治その他個人所蔵の資料や作品が出品され、ラファエルに関しては本校や黒田清輝、久米桂一郎、中丸精十郎、佐野昭所蔵のラファエルの作品の写真その他が出品され、野見宿禰に関しては東京帝室博物館、帝大人類学教室所蔵の埴輪その他が、尾形光琳については学外の各所蔵家から借用した光琳の作品が出品された。また、後藤祐乘に関しては東京帝室博物

館、前田利為、光村利藻、松谷豊二、加納秋三、和田幹男所蔵の後藤家の作品が出品され、明珍信家に関しては前田貞醇、松谷豊二、東京帝室博物館その他から借用した明珍家の作品が出品され、石磯姥命については東京帝室博物館、帝大人類学教室所蔵の銅鐸、銅剣その他が、本阿弥光悦に関しては本阿弥成善、岸光景、東京帝室博物館その他から借用した光悦の作品等々が出品された。

(三) 西蔵品展覧会

校内に陳列場を設け、正木会長の肝煎で河口慧海がチベットから将来した物品を展示した。慧海は明治三十年六月渡航、数々の危険を乗り越えてチベットに至り、仏法を研鑽して同三十六年五月帰国した。出品目録は月報「美術祭之巻」に登載され、三十七年に校友会は出品物の写真集『西蔵品図録』を画報社か



河口慧海 『西蔵品図録』より転載

ら出版した。なお、慧海は校友会の招きで本年十一月七日に「西蔵国と美術」と題する講演を行っており、その筆記は月報第二卷第六号（明治三十七年三月）に掲載されている。

(四) 余興

午前の部

一、喜劇「レター」 工芸各科会員有志（井上正、水戸駒彦、劍持正行、重田進十郎、福田東作）。

二、神代行列 鑄金科会員十人。

三、玉藻踊 彫刻科外五科会員有志二十名。

四、血染の雪 柔術擊劍部会員二十九名。

五、埃エラ及行列 英語科予備科会員三十五名。特に評判の高かつた出し物で、岡田三郎助と岩村透の指揮による舞台装置や筋立てが喝采を浴びた。一同が金盃を叩きながら唄った「埃及黒歌」の文句は

ハラチリブルハアソロビリテ、ニリブルダラケツルト

ロメレヨ、ウルタラヘレヤマラツルリリニ、ヲドロロレ

レヤマラツルリリニ、

というものであった。

六、活人彫刻 彫刻科会員（朝蔭円治郎、田中雄一）。

七、巴里美術学生行列 仏語科会員二年生十二名。合田清、岡田三郎助、岩村透、和田英作ら教官も加わり、パリのカフェーに集った美術学生やモデル、花売り、ガルスン、乞食の役を演じ、英語の唄やフランス語の流行歌を唄ったりした。

八、紅葉狩 彫金科、鍛金科会員十五名。

九、史劇「小督」 日本画科会員有志（金子朔太郎、石島文太郎、毛利教定）。

十、羅馬の武士 柔道、擊劍部会員三十名。

午後の部

十一、鉛管踊 西洋画科会員有志（辻永、森田亀之輔、大槻式雄、岸畑久吉、薄拙太郎、山下新太郎、和田三造ら七名）。
絵具のチューブに扮して踊った。

十二、中古欧州武士行列 フロレンス行列 英語科会員第一年十三名、第二年十一名。

十三、参内行列 彫刻科会員四十四名。竹内久一ら教師も参加。

十四、活人蒔絵 漆工科会員吉田秀男、福田東作、辻村延太郎外九名。

十五、天象行列 西洋画科会員三十四名。和田英作考案。紫雲、雨、風、雷、虹等をかたどった天衣をまとい葉環を被って行列し、「虹の歌」を合唱した。

十六、鑄金活人 鑄金科会員（鈴木清、重田進十郎、渡辺行義、小林正次郎、永島三郎）。

十七、活人彫刻「袂別」 彫刻科会員（石川確治、田中親光、佐々木栄多）。

十八、希臘行列「オリンピア競争」 西洋画科会員（亀山克巳、井上達三、市川誠一、高木誠一、高木巖、関屋敬治、熊谷守一外八十名）。

十九、凱旋行列 日本画科会員四十二名。関保之助の指導で鎧武者や束帯の文官に扮して演じた。

二十、地獄の宿換 凶案科会員二十五名。

二十一、朝鮮官妓踊 日本画科会員（古賀源四郎、谷口善四郎、平田栄二、前田千寸、橋爪成一郎、益田珠城、小沼直、伊藤豊吉）。

二十二、活人彫刻「死」バルトロメオ作 彫刻科会員（藤川勇造、和田嘉平治、吉田祥三、池田勇八、川上邦世、武田榮、小野六郎、田中親光、佐々木栄多）。大理石の群像に扮して演じた。

二十三、弓箭隊行列 弓術部会員七名。

二十四、江戸の花 漆工科会員十五名。火事に逃げまどう庶民を演じた。川之辺一朝なども出場。

二十五、活人画 図案科会員（森垣栄、沢田誠一郎、杉浦恭二、熊谷基外八名）。天の岩戸開きを演じた。

二十六、全校行列 職員部および生徒部会員。

以上の催しものの外に、趣向を凝らした飾りものが各所にしつらえられた。それについては月報「美術祭之巻」中の記事を転載する。

美術祭の飾りもの

石島古城記

數日來の宿雨に當日の天候果して奈何と氣づかひしが、ウ井ナスも我藝壇に恵みを垂れさせ給ひてや前日既に霽れ渡りて、氣清く空麗かなる菊日和、秋天清朗の心地何にたとへん様もなく、都大路を往き來ふ人もけふの佳き日を樂しう暮さん晴の衣裳、若きも老ひたるも一様に着飾りて出るは、右往左往、中にも上野方面に向ひたるは悉く我校に收容されたりとも謂ふべき盛況は、言はずと知れし我國には初めての美術祭を見んとて詰め掛けしなりけ



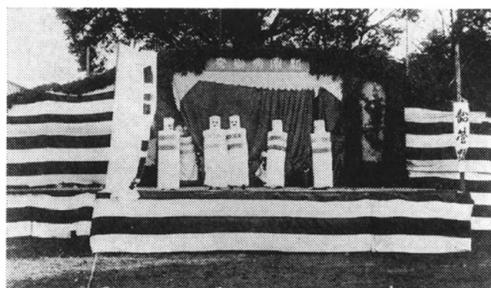
『美術祭記念帖』より 巴里美術学生行列 仏語科会員（合田清、和田英作、岩村透、岡田三郎助らの姿も見える。）

り。
先づ表正門は全躰悉く杉葉を以て之を包み、左右の柱には「紀念美術祭」「東京美術學校」の十一字を菊花にて表はし、門前には時ならぬ櫻花の爛熳たるなど見るからに心地よく、正門を入りてたゞちにアツと驚かし

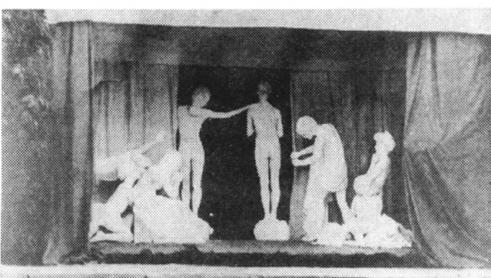
たるは玄關前に屹立せる擬彫刻美神の大像にして、右手に一人の愛兒を擁し左手は高く月桂冠をささげたる、全身の高さ二丈と八尺、綿と白布とを以て彫刻研究生の製作に係るところ、玄關入り階上なる遺蹟展覽會に上りて芳崖、ラファエル、光琳、宿禰、祐乘等の肖像作物及び河口慧海師が西藏將來の珍具などを觀覽して清興を肆にし左に折れて圖案科の前に至れば大法螺噴水の作り物あり、水に擬したる銀線を鬚と謬りて、これは海老ですかと眼のわるい老人の立談しを耳にせしが、折角の苦心も海老と見られではあまりにか、となきことなるべし。又其教室の周りは杉の青葉もてこれを圍繞し「COURDEDESSEN」の文字を表はし、其屋上より道を挟んで向ふの植込の中まで數條の綱に萬國旗を揚げたる裝飾方は流石に餅屋は餅屋なりと感嘆の外なく、又圓形に笊込



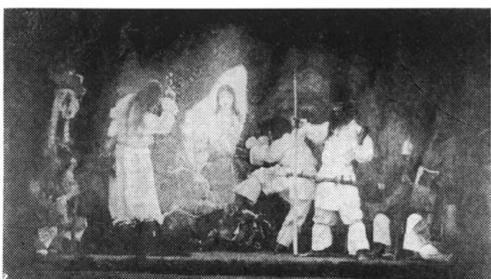
朝鮮官妓踊 日本画科会員



鉛管踊 西洋画科会員有志



活人影刻 彫刻科会員



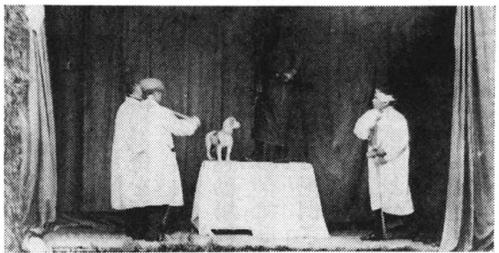
天の岩戸活人画 図案科会員

みし松の樹に白幕を被せて即席の大觸樓に見立て、或は木々の梢に造花を結びて「一目千本」の札を立てたるなど、恰も時ならぬ花の山に入るが如かりき。其傍らなる二基の瓦斯燈を利用して、^{〔ハイカラ〕}灰殻風の洋服男と海老茶式部に擬し、之に順路の案内札を持たしめたるは當意即妙とも云ひつべく。此を右折して運動場に向ふ兩側の道の邊には腰掛を倒に伏せて紙を貼し、地口めきたる諷刺畫を描きたる六十有餘の行燈は觀者をして腹を抱へて絶倒させ、こゝを過ぎて直ちに人目を惹きしは彫金科の考案なる刀劍其他の武器もて作りたる雲龍の飾り物にて、海野先生の意匠とか聞き及びしが、其精巧なる到底一夜作りとは思ひも寄らず。是より道を左に取れば日本畫科一年の考案にて名畫工の活人形あり、正面の金

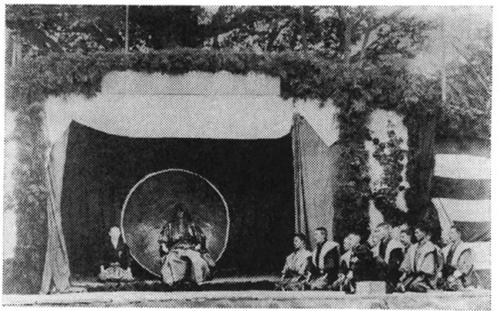
屏に描きたる畫虎の逸出したるところにて、虎の輪廓と座敷に印したる足跡のみを以て之を示したるは好き思ひ付にして、材料を多く用ひずして作れるは却て中々に趣味あり。これより奥へ進んで、常盤木に紅葉枝を交ふるところ、「道程僅かに三千里、空前の壯觀名家の絶筆、筆々飛動白龍畫面を逸出す」と銘打たる大看板に先づ氣を吞まれて、落葉を踏みつつ分け入れば幅二間高三間の大畫面に描き出せる龍頭觀音の前面に、白布を以て作りたる龍頭を括し付けしは、まさに畫面を抜け出さんとする意匠と聞きしが、其實は全軀の製作が間に合はぬに窮したる日本畫科の頓智にして、畫面の部は同科の三浦〔孝〕、多田〔雄三〕の兩氏が主として毫を揮はれしところとぞ。少し元の路に引



紅葉狩 彫金・鍛金科会員



铸金活人 铸金科会員



活人詩絵 漆工科会員

返して動物園に續く裏手の森、徑路稍や低からんとするところに一の標札あり。「定、一諸君携帶品落すべからざる事、一御婦人服装よごすべからざる事、一お小供衆ころぶべからざる事、一ぬけ道の功名すべからざる事、村役場」と、更にかたへの杭には「上野國錦小路四軒寺村」、「お前と渡し」とあれど川なきは什麼した事と見れば「水入らずの川」にて「仲よし」を生やしたるなどは僕等の様な野暮天には譯らぬ地口^{ぢぐち}り方、對ふ岸には「お氣休め處」、「なん茶屋」とある故、ド、リ、ャーぶくと腰を下せば、「あり合こじ付」と書いてはあれど誰も居ず、いくら動物園が近いとて狐につまゝれた譯でもあるまいと此を出づれば「此川に玉子鮭多く棲む」とあり、あたりの木々には可笑き名を附けたる、例へば

彈のかけ橋のモヰリにて、其上を老爺の牛を逐ひて行く姿勢恰も繪畫の如く、全躰葉を黒幕にて包みつ、脚には杵下を穿かしたるものなどとはまさかにお氣が付かれまい。「從是賣天山滿腹寺へ二里五丁」、「從是高天原祭神社へ一里三丁」と記したる標杭を右に見つ、やがて幽陰の森を出で、再び天日の光を仰げば茲には西洋畫科のボンチ畫展覽會あり、出品四十餘點ことごとく觀者を擽ぐり、白砂を敷き都鳥をあしらひて、「名にしおはゞいざことゝはんどどりわがおもふ人はありやなしやと」の一首に隅田川の昔を偲ばせ、蔦紅葉を纏ひ負笈を据えて「するがなるうつ山のべのうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり」の古歌に蔦の細道を型どり、また天然の菖蒲畑を利用し、これに造り花を添へて八ッ橋の

「考へ杉」、「眉に椿」、「ひまッ柿」、「馬鹿／＼椎」、「有難くも梨」、「やり栗」、「來賓を松」、「氣を紅葉」、「思ひの竹」など其他叢の中に「此邊お笑ひ草多し」の如き、何れも意匠の面白からざるはなく、彫刻科の出しものにて高村先生の意匠ときゝしが觀る者をして有繫^{つすが}に斯道の堪能家揃ひよと感嘆せしめたり。また中天に枯枝を渡して橋に擬し朶のかり橋と名けたるは飛

佛を寫し、「から衣きつゝなれにしつましあればはる／＼きぬるたひをしぞおもふ」と洒落たるは勞尠くして功多く、合せて東下りとは優にやさしき意匠にて平素の御修養のほども思ひやられて奥床しき漆工の考案。

さてまた鑄金工場の前には高さ二丈に餘る龍頭の大噴水あり、その頭部は臘、胴軀は杉葉を以て作り本水を利用したるは當日の壯觀。又同仕上工場の中には辨慶釣鐘を提げて叡山に登らんとするところの造り物は、藁と布とを用ひたり。

工藝科の二階には文人、女、軍人其他の張拔人形を出して景氣を添へ、同科庭前の櫻樹より椎の大木へ荒繩を編み付け、それに箆と針金を利用して蜘蛛の巢がらみを見せたるは奇抜なる意匠とや申すべし。

また、校庭（彫金科前の広場）には岡野菓子店、松のすし店、石崎酒店、厚生舎牛乳店、亀谷麵包店、松茸飯店、都新聞の飴屋店、柿、林檎等の水菓子店、西洋料理の長光亭、村井の煙草店、記念菓焼店などが店を並べた。記念菓焼店は板谷勤川（嘉七・波山）が中心となつて開いたもので、大繁昌であつた。校内は觀衆で立錐の余地なき有様となり、その中には川上音二郎と貞奴の姿もあつたといふ（『美術新報』第二卷第十七号。明治三十六年十一月五日）。混雜緩和のため本校の依頼で下谷警察署長以下六十五名も出動した。

⑩ 明治三十年代半ばの参考書

『東京美術学校校友会月報』第一卷〜第三卷には「問答」欄が設

けられていて、校友会員の質問とそれに対する応答が記されているが、そのうちの参考書に関するものには興味深いものがある。

まず、第一卷第四号では西洋名画に関する図書についての「谷」（鎌太郎）の問いに対して「米利堅生」（久米桂一郎または岩村透）は次のように答えている。

「上略」記者の承知致居候處にては、蒐集範圍の汎くして、印刷鮮明、且價格の廉なるは、獨逸出版の美術帖にて「Der Stil」(In den bildenden kunsten und gewerben herausgeben von Geog Hirth)と申ものに候、代價は一帖十二枚入一マルクにて、既に出版相成候分にては千枚近くに相成候間、完結の上は幾千枚と云ふ數に可相成、充分完全のものと存候。ルーブル美術館、ナシヨナル、ガレリー其他全歐至る處、著名の美術館にては、夫々所藏の名畫を上梓出版致居り、完全のものも、夥しく有之候得共、是等は代價の稍高き爲、誰の手にも容易く入り得べきものに無之候。例へば千九百九十九年巴里美術書出版協會より刊行相成候、Le Musée du Louvre などは、甚だ完全のものには候得共、全部六冊出版當時の正價五百フランと云ふ高値に御座候。尙又殆ど同時に出版され候、The National Gallery と申候は、ロンドン、カツセル社より出版致候ものにて、全部三冊豫約當時の正價七十圓、今日は百七十圓と云ふ高價にて賣買致居候。斯の如き次第にて、完全のものは何程にても有之候得共、直段の高き爲我々貧書生の懷中には到底話に相成不申候。

直段の最も廉にて、我々日本學生の財布に最も適當し、且研究